

**三橋延世さん（本学大学院自然系コース（理科）修士課程2年）が
インドネシアで公開授業を行い、高い評価を得ました。**

今回で第5回となるインドネシア授業研究大会（7月13日～14日）に本学から教員2名と学生4名が参加しました。インドネシア教育大学（インドネシア・バンドン市）が主催する本大会は、継続的な授業研究（lesson study）によって授業の質を改善するために、日ごろの授業実践や研究を共有することによって教員同士、教員と大学関係者が研修し、交流する場として注目されています。今年の参加者は500人を超え、インドネシアだけでなくサウジアラビア、オーストラリアからの参加者も見られました。

大会初日には、本学教員の小野由美子（教授・言語系コース）が“POST LESSON DISCUSSION：WHAT DO INDONESIAN TEACHERS REFLECT ON？”と題して基調講演を行い、午後からはインドネシアの現職教員や大学教員、学生が様々なテーマで研究発表を行いました。

翌日はレンバン市の中学校に移動して、インドネシアと日本の現職理科教員による公開研究授業と授業検討会が行われました。日本の教員として本学の学生である三橋延世さん（本学大学院自然系コース（理科）修士課程2年）が授業をされましたので、インタビューしました。

Q：今回の授業のテーマとねらいは？

三橋：授業のテーマは、「植物の成長と発達」です。ねらいの1つは、生徒全員が自分自身でプレパラートを作製して、細胞分裂を顕微鏡で観察できること。二つ目は、植物が成長するというのがどういうことか、生徒が観察を通して理解することです。

Q：授業をしてみたの率直な感想は？

三橋：授業を行ったのは7学年（日本の中学1年に相当）の生徒ですが、生徒が顕微鏡を使い慣れておらず、日本なら顕微鏡の使い方の指導までしなくても生徒自身で見られるのですが、インドネシアの生徒たちには顕微鏡の使い方まで指導しなければならなかったのが授業は難しかったです。

Q、インドネシアで授業をしてみて、何か違いを感じましたか？

三橋：理解できていない生徒たちへの指導に違いを感じました。日本では、全員の生徒が理解できるまで、放課後や休み時間などを利用して、徹底的にフォローを行います。インドネシアでは、理解できない生徒たちへの指導があまりなされていないような感じを受

けました。

Q：今回、授業をしてみて学んだことは？

三橋：理科の授業については、使っている薬品、実験材料等はほとんど同じであるということ、内容に関してもほとんど同じであることに驚きましたが、その一方で、実験が少なく知識中心の授業が展開されているように感じました。

Q：最後に一言。

三橋：今回の授業研究会は本当に勉強になりました。また機会があれば、他の国の教育内容や指導方法、生徒の実態等を学びに行きたいと思っています。この機会を与えて頂いた先生、共に参加していろいろとサポートしてくれた学生の皆さんに深く感謝いたします。ありがとうございました。



対面式。自己紹介をしました。



公開授業前の準備。



多くの先生方が見守る中、授業開始。



一人ひとりにていねいなサポートをする三橋先生。



子ども達も興味津々。



授業後にみんなで記念撮影。

文責 佐藤大志（大学院・幼年発達支援 L1）